

集落の絆 守り続ける

高台移転へ 知恵を結集

小指契約会―石巻市北上町十三浜



3・11大震災

「経験を分かち合った者同士、まとまっていけばいい」「これから高齢となり、見ず知らずの隣人との生活は不安。この先も契約会は生きる」

石巻市北上町十三浜の相川運動公園にある仮設住宅集会所。4月下旬の夜、避難生活を送る小指(いざし)地区の男衆が集い、話を弾ませた。

住民の言う契約会(契約講)は、漁村集落の小指で昔から受け継がれてきた自治(互助)の組織。家々の後継ぎが会に入り、冠婚葬祭、家普請、草刈り、祭りなどを全員で行ってきた。

現会長の漁業阿部強(つよし)は、話を弾ませた。住民の言う契約会(契約講)は、漁村集落の小指で昔から受け継がれてきた自治(互助)の組織。家々の後継ぎが会に入り、冠婚葬祭、家普請、草刈り、祭りなどを全員で行ってきた。

小指は石巻市の太平洋岸のほぼ北端に位置する。小さな入り江に25戸が連なつた集落では、東日本大震災の大津波で18

戸が流され、逃げ遅れた老夫婦の家族3人が亡くなった。

「いかに生活を再建するか」。話し合いが始まったのは被災の4カ月後。漁業武山勝義さん(60)は「最初はそれぞれ畑などに家の土地を求めようとしたが、三陸海岸の国立公園の建築規制が壁になった」と話す。

当時の契約会会長は浜の一人である建築家の佐々木文彦さん(56)。集団移転という難しい選択に直面して、日本建築家協会宮城地域会(仙台市)の仲間に応援を求めた。

有志7、8人が小指に通い、住民と毎月のワークショップを重ねた。集落調査をした北海道大の研究者、同市北上総合支所職員、北上町を応援する東京のNPO法人メンバ―も議論に加わった。

「住民の自助を手助けしたい」という支援チームと、契約会との協働作

業だった。つなぎ役になつた佐々木さんは言う。

「集団移転先探しや家造りを土地や建築方法、費用などの条件から、住民と専門家が率直に意見や案を出し合った」

移転先は、住民たちが畑地などに利用する小高山の土地を出し合った。問題にも知恵を出し合った。

た。漁業で生きるため、住み続けたい」という11戸が移転する。

「移転先の区画はどれも100坪しか認められず、漁師の家に欠かせぬ倉庫や十分な駐車スペースがない」。そんな課題にも知恵を出し合った。



仮設住宅の集会所で、高台移転への議論を専門家らと重ねた小指契約会のメンバー＝4月下旬、石巻市北上町十三浜

2月3日には、津波で途絶えた春折とうが復活し、家内・海上の安全、大漁を祈った。獅子踊りが、残った家々や家屋跡の仮設倉庫を巡り、浜の守り神を呼び戻した。

浜で代々、住民たちを結び付けてきた契約会。漁業佐々木克彦さん(59)が語る。「津波が来た日も25戸の男手で午後2時ごろまで、契約会の収入源のヒジキを採った。皆が顔をそろえていたから、集落は生き延びた」

そのつながりは、集落が移転しようとも変わらぬ。(寺島英弥)